

草加市立歴史民俗資料館

# れきみんだより vol.11



東地総田遺跡の発掘調査の様子（平成 27 年 [2015]）

きて、みて、感じて草加の歴史—遺跡から見る草加—  
会期：令和 3 年 7 月 1 日（木）～ 8 月 22 日（日）

草加市内には遺跡が 18 か所あります。時代としては縄文時代から江戸時代までに及びます。

草加市内では昭和 57 年（1982）に行われた西地総田遺跡の発掘調査以降、現在に至るまで幾度かの発掘調査が行われ、これまでに方形周溝墓や古墳、祭祀を行ったと考えられる遺物が出土しています。

このような発掘調査の積み重ねによって、古代の草加地域にも人々が存在していたことが解明されてきました。私たちは、郷土の先人たちの

歴史の積み重ねの上に成り立っていることを忘れないよう、心がけていきたいものです。

企画展では、過去の発掘調査の成果を踏まえながら、最新の研究成果を紹介いたします。また、発掘調査や出土した遺物の整理作業の様子も併せてお示し、発掘調査や出土遺物がどのように扱われているのかをご紹介します。

地面の下にどのような文化財が眠っているのか、ぜひご覧ください。

## ■はじめに

市内では近年、埋蔵文化財の発掘調査が増加傾向にあり、多くの遺構と遺物が確認されました。

草加地域は、中川低地にあり標高も約 3m と低いことから、江戸時代以前は人が生活していた可能性は低いといわれてきました。しかし、近年の発掘調査や研究が進んだことで、今から約 1,600 年前には人々が生活していた可能性のあることが分かってきました。

また、方形周溝墓や古墳と呼ばれる古代の墳墓も確認され、昨年度の調査でも古墳の一部が見つかったことから、谷塚地域が墓域であった可能性も高くなりました。

今回は、企画展「きて、みて、感じて草加の歴史

— 遺跡から見る草加 —」の開催に合わせて、近年の発掘調査の成果の一部をご紹介します。

## ■毛長川周辺の遺跡

草加市は、埼玉県東部一帯に広がる中川低地の南部に位置します。中川低地は、大宮台地、武蔵野台地、下総台地に囲まれた南北に広がる低地帯です。

縄文海進時では中川低地の多くが東京湾に没していました。その後、海水が後退して、中川低地が形成されました。

草加市内には、18 か所の遺跡が存在しています。

図 1 のとおり、遺跡の大半は中川、古綾瀬川、毛長川の周辺に集中しています。



図 1 市内遺跡分布図

|     |                             |
|-----|-----------------------------|
| 1-1 | ごてん いなり こふん<br>御殿稲荷古墳 A     |
| 1-2 | ごてん いなり こふん<br>御殿稲荷古墳 B     |
| 2   | かきのきうめ いせき<br>柿木梅遺跡         |
| 3   | かきのきょうづか<br>柿木経塚            |
| 4   | ひがしちそう だ いせき<br>東地総田遺跡      |
| 5   | にしち そう だ いせき<br>西地総田遺跡      |
| 6   | なかちようぬまた いせき<br>仲町沼田遺跡      |
| 7   | とんぼ いせき<br>蜻蛉遺跡             |
| 8   | ほりかえ いせき<br>堀返し遺跡           |
| 9   | けながぬまとかわら いせき<br>毛長沼外瓦 A 遺跡 |
| 10  | けながぬまとかわら いせき<br>毛長沼外瓦 B 遺跡 |
| 11  | ほんでんみなみとおり いせき<br>本田南通遺跡    |
| 12  | はなぐりながれ いせき<br>花栗流遺跡        |
| 13  | みやぬま いせき<br>宮沼遺跡            |
| 14  | かきのきかめ いせき<br>柿木亀遺跡         |
| 15  | かきのきつる いせき<br>柿木鶴遺跡         |
| 16  | せざきつみそと いせき<br>瀬崎堤外遺跡       |
| 17  | くぬぎ いせき<br>櫛木遺跡             |
| 18  | やつちようひがしぬまた いせき<br>谷塚町東沼田遺跡 |



ところで、縄文時代の毛長川は川幅がおおよそ 200m を超えると考えられています。その大きな原因は、毛長川が古利根川や元荒川の一部であったためと考えられています。

毛長川周辺では、縄文時代後期（約 3,200 年前）の土器片が出土しており、自然堤防（上流から流れた土砂が川の両岸に堆積し、微高地となった場所）はこのころに形成され始めたと考えられています。

弥生時代になると低地内を流れていた古利根川や元荒川の流路が変化したり、水量も減少したことから毛長川は独立した河川となりました。古墳時代になると自然堤防上が生活圏として機能していた痕跡も見つかり、方形周溝墓や古墳等の墳墓も出現しました。

そして、奈良・平安時代、その後の鎌倉時代以降まで、市内から遺構や遺物が出土していることから、連続して生活圏が確保されていたと考えられます。

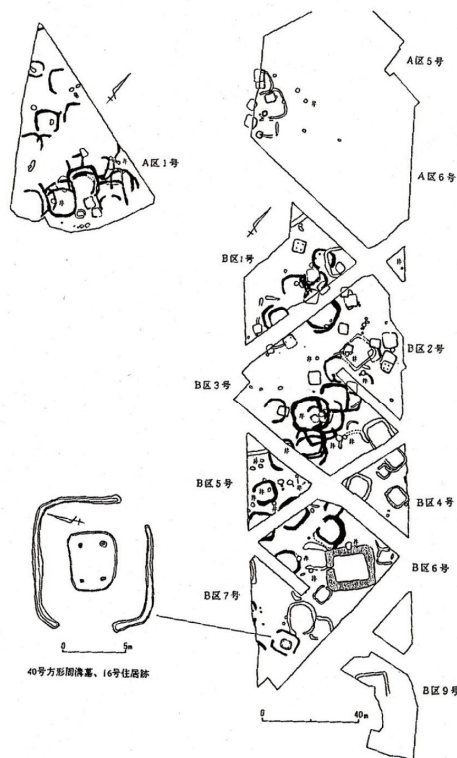


図 2-1 鍛冶谷・新田口遺跡（戸田市）  
図改変

## ■調査から見てきた古代の草加

最新の調査結果から見てきたことは、草加市には、約 1,600 年前から人々が生活していた可能性が高く、そして、墓域が広がる地域であり、なおかつ祭祀が行われる神聖な場所でもあった可能性が高くなりました。

次の図を見てみましょう。図 2-1 にあるように溝に囲まれた中にいくつかの穴が見られます。また、図 2-2 では、四角い枠が幾つも重なっているように見えます。そして、図 2-3 では、ある一定方向だけに溝につながっていないような遺構が見えます。当初このような遺構は全て方形周溝墓という墳墓だと考えていました。

しかし、方形周溝墓は方形に溝を区画した後に亡くなった人を埋葬するために盛土を築くような形をとっており、溝に囲まれた中に柱穴のようなもの、

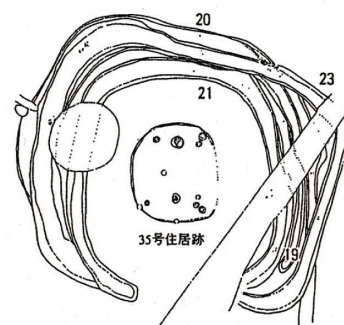
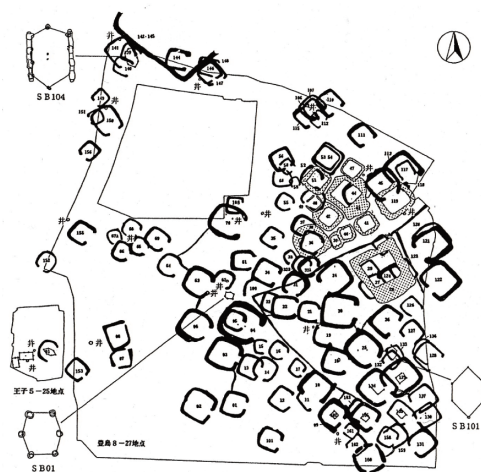


図 2-2 大久保領家片町遺跡（さいたま市）  
図改変



神聖な墓域を何度も造り直す必要性について、一部の研究者から疑問の声が上がっていました。また、関東地域以外の遺跡からも同様な事例が見られることが分かってきたことから、改めて方形周溝墓の研究を見直すことになりました。

図3は及川良彦氏が方形周溝墓と溝を持つ竪穴建物跡の削平模式図を表したものです。このように後世の開発などの削平深度によっては、墓と建物跡の区別がつかなくなる状態が見受けられ、実際の発掘現場でも判断が付きにくい遺構となっています。

さらに福田聖氏は、方形周溝墓について埋葬施設の検出、盛土の遺存、副葬品的遺物の出土、底部穿孔壺の出土の四つのうちいずれかを満たすものを「良好な方形周溝墓」と示し、加えて「①直線的な辺を持つこと。②周溝が全て周る、あるいはコーナーの一つに陸橋がある。また、四隅が切れている平面形のもの。③施設としての溝中に土坑がある。④壺が多く出土する。⑤出土土器の完形率が高い。⑥コーナーや陸橋部分の際や特定の溝からの遺物の出土。⑦整然とした群在のあり方。⑧周溝の幅が1m以上のもので、深さが50cm以上であること。」の8項目を定義

としました。

また、福田氏は改めて及川氏らの研究をもとに周溝を有す建物を定義し、「①一边の中央が切れる、またはそれに加えコーナーの一つが切れるという開口部のあり方。②13m 前後、10m 前後の周溝内の規模。③壺に加えて甕の出土が多い。④周溝の幅と深さが相対的に細く、浅い。」と4つの定義を示しました。

この研究を踏まえ、谷塚町にある東地総田遺跡で確認された図4・5の溝状遺構を見てみましょう。まず図4は、溝幅が58cmから85cm、深さ27cmあり、北側の確認できた遺構の長さは約9mで溝中に土坑は見つかっていません。また、出土遺物は壺よりも甕の割合が多く確認できます。そのため、方形周溝墓ではなく、周溝持建物の可能性が高いと考えられます。同様に図5は、溝幅は約2.8mですが、その他は図4同様に方形周溝墓の定義に当てはまらず、壺や周溝内の土坑、器台形土器と呼ばれる千葉県

の竪穴建物跡から出土する遺物も確認されていることから、やはり周溝持建物の可能性が高いといえます。

以上のことから、古代の草加にも人々が生活した可能性が高いことが分かりました。

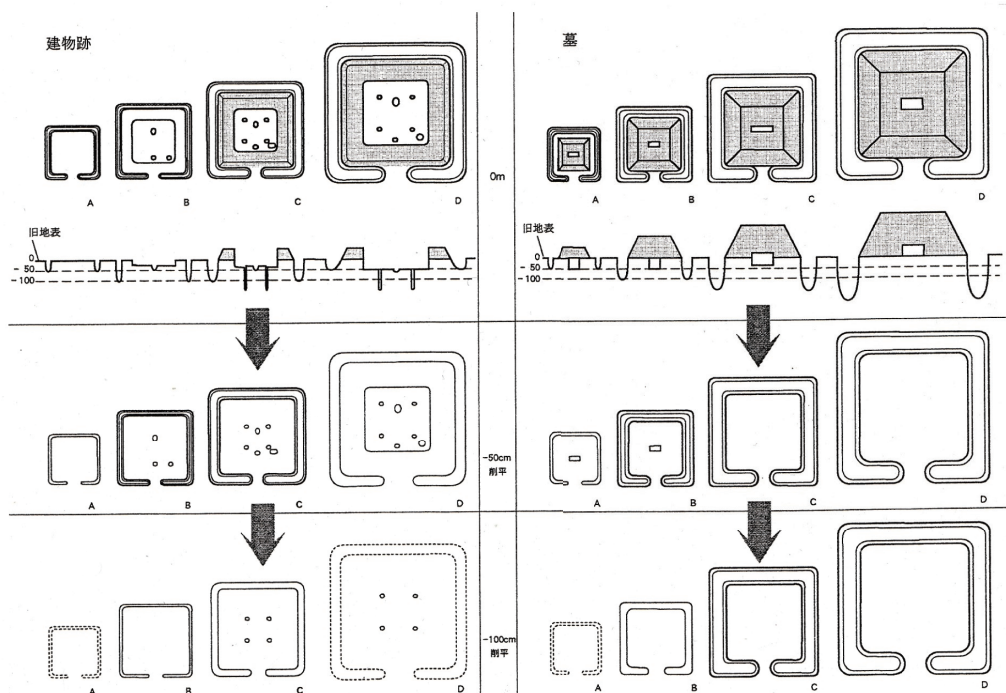


図3 方形周溝墓と溝を持つ竪穴建物跡の削平模式図





次に祭祀について見ていきましょう。現在、市内の遺跡からは石製模造品<sup>せきせい も ぞうひん</sup>、土製模造品<sup>どせい</sup>、ミニチュア土器などの生活に使用するには不向きな道具が見つかっています。これらの遺物は、過去の研究から祭祀などに使用されたものではと考えています。

また、毛長川を挟んで、草加市の対岸には伊興遺跡いこう（足立区）が広がり、祭祀遺構や遺物が数多く確認されています。市内遺跡から出土した遺物の中には伊興遺跡から出土した遺物によく似たものもあるため、何らかの関わりがあったと想定されます。この他、毛長川近くの遺跡から出土した遺物は、水に関わる祭祀を行っていた可能性も想起されます。今後、新たな発見があるかもしれません。

市内遺跡からは、埼玉県内の行田地域や入間地域、  
はとやま らんざん 鳩山・嵐山地域、他県では千葉県地域や静岡県浜名湖  
ぎょうだ 沼津地域、いるま 入間川流域、しずおか 静岡市、はまなこ 三浦半島など、  
 周辺で製作された遺物も見つかっています。1,000  
 年以上前の草加地域は、旧入間川を始めとする元荒  
 川など大小の河川が流れていたこともあり、人や物  
 が川を通じて運び込まれてきた地域だったと考えら  
 れます。

そして、江戸時代になると日光街道も整備されて  
草加宿しゆくも確立して栄えることとなります。

今回展示する遺物のうち出土した幕末から近代にかけて製作された磁器などは、日光街道に隣接する農村から明治時代以降に東京の近郊地として発展した草加地域の歴史を垣間見ることができます。

そして、特に注目すべき点はオランダで作られた「デルフト陶器」が見つかったことです。このような陶器は当時としては、とても貴重なものでした。このような外国で制作されたものが出土した理由としては、財力のある商人がいたことを示す材料になるのではないのでしょうか。

## ■おわりに

今回の企画展では、近年の調査で見つかった多くの遺物のうち、保存状態の良い遺物を展示します。郷土の歴史について、より多くの市民の方々に関心と理解を深めていただく契機となることを期待します。

今後も草加市の文化財を調査・研究、保存・活用していくためにも、皆さまのご理解、ご協力をお願いいたします。

(文：生涯學習課文化財保護係 飯島 義広)



第一段 千住



第二十九段 鼠が関



第四十段 大垣

今回、紹介する資料は、洋画家・日本画家のこすぎ小杉放庵による作品「奥の細道画冊」です。

小杉放庵は本名をくに たろう国太郎といい、明治14年（1881）に栃木県日光町（現在の日光市）に生まれました。日光在住の洋画家であるい お き ぶんさい五百城文哉に師事した後に上京し、執筆活動や芸術活動に取り組んでいます。その活動は多岐にわたり、よこやまたいかん横山大観やくに き だ国木田独歩、あくとがわりゆうのすけ芥川龍之介といった著名人と親交を結びました。

当初は「未醒」と号して活動していましたが、大正12年（1923）ころに「放庵」（後に「放庵」と改め、水墨と淡水による日本画を描くようになりました。

さて、「奥の細道画冊」ですが、昭和7年（1932）にしゅんようどう春陽堂から発行された木版画43点からなる画冊です。奥付には、著作者はみ せい小杉未醒、木版彫刻師はおおくらとう た大倉藤太、木版印刷師はた ぐち き く まつ田口喜久松・いわ た たい じ岩田泰治の名前が記されています。また、画冊には『おくのほそ道』行程上の16か所について放庵が訪ねた際の感慨を記した小冊子が付いています。

木版画はそれぞれ台紙に添付され、その上には『おくのほそ道』の該当箇所を印字した薄紙が貼られています。「第一段 千住」から始まり、「第四十段 大垣」まで『おくのほそ道』の43の場面が描かれ

ています。なお、木版画の内、「荒海」「散柳」「等栽」には段が付いていません。

放庵は、小冊子に「芭蕉翁奥の細道に興味を持つて居るところから、或年の秋思ひ立つて、連れと二人で一通り歩いて見たことがあります」と記していますが、昭和2年（1927）10月に画家のきしなみひやくそうきよ岸浪百草居とともに芭蕉の足跡を訪ねた旅行を指しているのではないかと思います。木版画は、『おくのほそ道』の文意を考えたものの他、放庵の実見した風景が描かれています。例えば、「第二十九段 鼠が関」には、磯で蟹をとる女性が描かれています。これは放庵がねず鼠が関を訪ねた際に見た風景であることが小冊子に記されています。『おくのほそ道』の風景観と放庵の見た風景が交わり、一つの作品を描いていることが分かります。

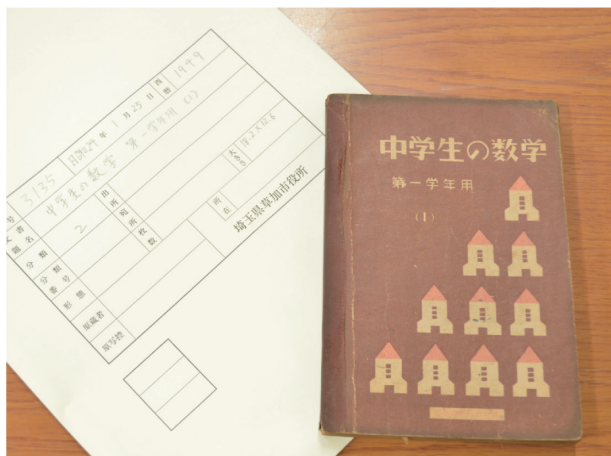
43点の木版画には、残念ながら草加は画題に選ばれていません。しかしながら、『おくのほそ道』が近代の芸術家たちの創造力・インスピレーションをゆさぶる作品であったことを伝える意味で、「奥の細道画冊」は貴重な資料といえます。

歴史民俗資料館の収蔵品データベースでは、「奥の細道画冊」の画像を公開していますので、興味のある方はご覧ください。



◆れきみん歳時記（令和3年2月～令和3年5月）◆  
歴史民俗資料館で開催した講座やイベントなどの取組を紹介します

2月 資料整理に励みます



緊急事態宣言下、れきみんも臨時休館が続きます。資料をご覧いただけず残念ですが、このようなときこそ、収蔵資料の整理に正面から取り組む好機です。職員一同、次の企画展に向けた調査や資料整理に励みました。

4月 久しぶりの端午の節句展



昨年は緊急事態宣言の影響により、開催することができなかった企画展「端午の節句展」を開催することができました。

昨年の思いも込めて、つるし飾りを多く展示し、会期中は多くの方にご覧いただきました。

3月 なんとか開催できました



毎年恒例の企画展「桃の節句展」ですが、緊急事態宣言の影響により、当初予定していた2月から開催することができませんでした。幸い、3月末に6日間だけ開催することができました。職員一同、少しホッとしました。

5月 久しぶりの蓄音機コンサート



久しぶりの蓄音機コンサート。蓄音機を動かすのも久しぶりですが、やはり何度聞いても魅力的な音を届けてくれます。

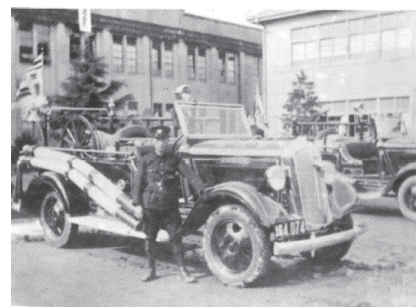
SPレコードの整理を続けつつ、蓄音機コンサートも続けていきたいと思っています。

## ◆企画展の次回予告

タイトル：「火消の歴史－草加八潮消防局へのあゆみ－」

開催期間：令和3年10月5日（火）～12月12日（日）

私たちの生活を守る「火消」を題材とした本企画展を通じて、先人たちが命がけで草加市域を守ってきた歴史や平成28年（2016）に発足した草加八潮消防局をはじめとする現在の消防についてお伝えします！



草加町消防団の自動車（大正時代）

## ◆団体見学のお申し込みをお待ちしています

歴史民俗資料館では、団体見学のお申し込みをお受けしております。

職員の展示解説や懐かしのSPレコード鑑賞など、お時間に応じた案内プログラムを用意しておりますので、ぜひお申し込みください。

お申し込み電話番号 048-922-0402



草加市立歴史民俗資料館  
**facebook** やってます！！

いいね！



皆さんに草加市の歴史や文化、歴史民俗資料館の活動を伝えたくて公式フェイスブックページを開設しています。様々な情報を発信していきますので、ぜひご覧ください！

草加市立歴史民俗資料館

市公式ホームページ内のSNSページまたは隣のQRコードからアクセスすることができます！

## 草加市立歴史民俗資料館

【開館時間】 午前9時～午後4時30分

【休館日】 月曜日（祝日または振替休日の場合は翌平日）  
年末年始

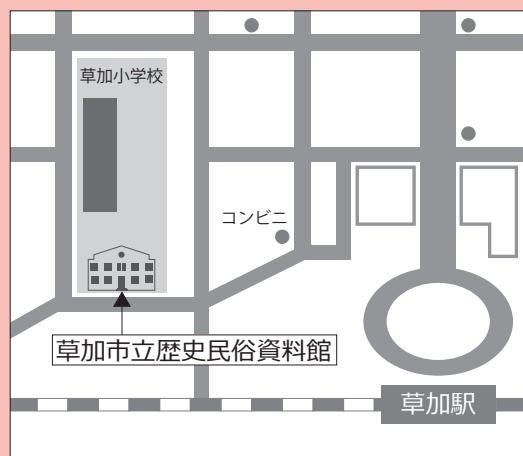
【入館料】 無料

〒340-0014

埼玉県草加市住吉一丁目11番29号

TEL:048-922-0402 FAX:048-922-1117

E-mail:sokarekimin@city.soka.saitama.jp



東武スカイツリーライン「草加駅」東口徒歩7分  
駐車場はありません。公共交通機関をご利用ください。

れきみんだより vol.11

発行日：令和3年（2021）6月20日 編集・発行：草加市立歴史民俗資料館